

## ◇ 研究ノート ◇

## 日蓮聖人にみる人間観（第二輯）

町 田 是 正

※この小論はひごろの覚え書ノートである。今日的人間像を考えるために試案としてまとめたものである。

「人間」<sup>ヒト</sup>一個の存在、それは極微なる存在である。否、「存在」するというよりは、この世界に一瞬明滅する儚なき点々と云うべきかも知れない。それは風にそよぐ「葺」にも似たものである。

しかし、その「葺」は時には懊惱・苦悶<sup>なやみ・くるしみ</sup>、そして自己の無力不能を慚じ、絶望的に自己を抛け棄て、悲哀の痛みを胸にかみしめることができる。或は自己の存在する意義をみつめ、思索の世界に沈潜し、それをたしかめるべく、試行錯誤の行動を繰返す存在でもある。つまり、耐えること・祈ること・懺悔（回心）<sup>くしん</sup>すること・実践することの出来る存在である。

然るにいまの人間は、自らのつくりだした巨大な機械文明に驚き、他方おこがましくもその豊かさのみを享受しようとしたのである。しかし、その物質文明がひとたび人間虐殺の元凶ともなりはじめたとき、機械に負け、環境に負

けた人間はその現象を人間性の喪失とか、人間疎外と呼び、或るものは逃避し、或る者は抵抗するの気概をみせたが、そこには近代人に共通する本質的迷妄とも云える人間性を形式に求める弱さがみられる。やれ人間性の確立とか、人間尊重と云った美しい響きのある社会的・文化的用語をつくり、それをもって人間救出の策と考えたのである。実は此処のところに根本的な錯誤があること。人間復興への眼を向けたものである。人間は自らの創造した物質文明のもたらした公害を議論する以前の問題として、先づ自己を裁く責任を背負ったのである。謙虚のなかに自信を秘め自らの生きるべき土壤を創成するときに至っている。

筆者はいま此処に、日蓮門下の一人でありたいと希い、宗教的実存の道標を求めようとしている。そして、日蓮門下として生きるための「原点」が、往古七百年の向うがわに在るならば、その時間的「壁」を超越しようとする力を培ちかねばならない。その還元への努力を絶つてはならないと諫しめるものである。

七百年のその往古、まことの宗教者として生き抜こうとされた尊い生命、永遠の生命があるとすれば、その意義をみ出しみつめることは、今日の必須の課題であらう。

○「勸持品云有諸無智人惡口罵詈等云云。日蓮當此經文。……乃加刀杖者等云云日蓮誑此經文。……常在大衆中欲毀我等過等云云。向國大臣婆羅門居士等云云。惡口而聲聲數見擯出。數々者度々也。日蓮擯出衆度。流罪二度也。……過去不輕品今勸持品。今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可爲不輕品。其時日蓮即可爲不輕菩薩……」(寺泊御書・昭定遺五一四頁)

○「而此経者、如来現在、猶多怨嫉、況滅度後」(法華経法師品)。「此法華経、能令衆生、至一切智、一切世間多怨難信、先所未説、而今説之。」(法華経安樂行品)。

○「濁劫惡世中、多有諸恐怖、惡鬼入其身、罵詈毀辱我、我等敬信仏、当著忍辱鎧、為説是経故、忍此諸難事、我不愛身命、但惜無上道、」(法華経勸持品)

右に摘出した御書と要文は周知のように宗祖の忍難弘教に関わるものである。法華一乗の信仰のために「我が身を捨てて悔いなし」として生きることが、難事のうえにも難事であるとされている。だからこそ、忍難の弘教(難事に堪える行者)に生きることが、その難事を色説(実践)によって実証することであると共に、忍難の弘教に生きることによって、宗教的実存者たることである。いま宗祖はみずから、その忍難の弘教に生きたのであると、その実践(色説)の自覚を御文書全篇に洋溢させているのである。

さて、現代の我々はここに大きな落としあなのあることに気付くべきである。即ち宗祖の忍難弘教の英姿を想起することによって、直にそれをもって、いとも簡単に「法華経の行者」であつたとなし(理解したと思い)、末法の法華経行者として疑いのない事実であつたと、片付けてしまつてはならないことである。つまり、「法華経行者」であつたと云うのは、既成の觀念によって悉ど鵜呑の形をもって、法華経の行者で「あつた」とするのであつて、そこには改めて、人間日蓮の、宗教者日蓮の行動軌跡がどれほどの意義をもっているのか、と云う日蓮門下として生きるための思索と実践への、アプローチさえ生まれていないのではないか。

筆者は惟う。従来の訓詁実証主義の立場にたよる御文書の摘出引用(極言すれば間引)の羅列をもって、宗祖の御精神を顕彰したとか、延いては宗祖は法華経行者であつたと得々としていたのでは、宗祖の宗教的自覚の意義をみつ

めることは不可能であると云いたい。だがしかし、筆者はここで、旧来の伝統宗学の方法論に関して、批判を加える意図は毛頭ないし、またその功罪を論ずる資格もない。それどころか優陀那教学以来の組織体系化されてきた日蓮宗学の果した役割が、どれほどに教団の発展と信行の涵養とに益したかは、筆者の言の及ぶところではない。しかし、そうした伝統教学を土台として、護法運動が展開されている現情をみると、一沫の淋しさをおぼえるのである。

○現代宗学の学的方法は如何にすべきか、また現代宗学確立への道・展望はいかに、といった焦眉の問題については、先年来より本学の室住教授が本機関誌等を通して提言されているので参照されたい。宗学徒の傾聴すべき論旨にあふれている。さて、現代的な宗学を建設するのだと云って、直ちにいま流行の「脱」的志向のみを強調したとしても「学」として成り立つものではない。「宗学」であるためには論理的・合理的であると共に、まことの信（生きていく人間）の認識がなければならない。若し旧来の教学的方法に対して発言を許してもらえらば、個別的な具体的事実のみを大事にすることは、幼児的なプリミティブな発達段階であり、またカテゴリー的思考の欠落した病的状態といえるのではないか。

法華経行者の行動軌跡（宗教的実践）が意味する事柄について、じっくりと見究める態度が大切である。筆者のこうした至極当然の発言に対して嘲笑の声さえあるかも知れない。従来、ややもすればいとも簡単に「法華経行者」であったとか、末法の大導師であったと表現して憚らない態度に対して、筆者は大きな痛みをおぼえるのである。

宗祖が法華経の行者であった「こと」の意味は、単なる修行者の意味とは違うのである。ともすれば、法華経行者の「行者」というコトバに焦点が合わされ、御文書のなかに又は法華経の要文に徴しての、訓詁実証的研究に精力が注がれてきたのである。そして云く「末法の法華経行者」であったとするのである。

だが然し、筆者はそうは思わない。法華經の行者であつた「こと」の意味が、改めて問われなければならない。即ち人間として行動した「こと」。宗教者として堪え難きを堪えた「こと」。そうした「こと」(宗教的実践——色説)のなかに、宗祖の生命が宿っているのである。現代の我々が求めているのは、そうした永遠の生命なのである。若しこうした認識に欠けるならば、宗祖の生涯は我不愛身命・但借無上道の厳しいものであつたと理解しても、それはコトバのうえでの机上の論として理解するにとどまり、行動理論としての思索の「種」は芽生えてこないのである。つねに我々の宗教的実存に関わる問題として把える態度でなければ、宗祖の現代的意義は見失われてしまうのである。宗祖が行動された「こと」とは、コトバのうえでの捨身弘教であつたり、勸持品二十行偈の色説であつたか、と云う表現のニュアンスとアクセントの問題で事が足りるものではない。



宗祖がみずから、弘教者(蓮長)の立場から飛躍して法華經行者(日蓮)の道を選び扱ろうとした、その絶対的な岐路に立たれたとき、人間として、また宗教者としても、煩悶・懊惱されたことと思う。宗祖は決して聖人ではなかつたし、まして超人ではなかつたからである。若しも超人であつたり聖者であつたならば、法華經行者の厳しい道を選択する必要はなかつた。当に「あれか・これか」の二者択一の絶対の立場に置かれたときの決断こそ、宗祖の叡知のしからしむるものであつた。我が身を捨てて悔いのない永遠の生命(法)をそこに発見されたからである。法華一乗の信仰に生きることこそ、宗教者として生きる法悦を見出しえたからである。

宗祖が自ら選択決定した法華經行者の忍難の道は、謂うなれば自らの自由を勝ち得たことでもある。自らの意志に

よって、法華經行者の道を忌避するか、或は行者となる「こと」を肯首するか、この二者択一の選択の決断の意味は深く重いのである。その決断こそ、自ら歴史に於ける主体的存在であること、自己を自己として自覚（実存）せられたことなのである。

宗祖が自己の生命を賭して、法華一乗の信仰に生きぬかれたことは、単に、歴史のなかに存在したことだけでは無い。即ち、捨身・という自己の存在資格を「無」となしたことに深重の意味がある。日蓮・とは尊い名号であるとともに「日」と「蓮」とに象徴される法華行者の自覚の宣命である。法華經行者の自覚とは、まさに「有」は「無」を媒体として確認されるという弁証論理の実証でもあった。

実践と行動力を伴はない人間は抽象にすぎない。ともかくも、對他実践倫理に飲びを求めるもよし、上求菩提・下化衆生の自他行に励むもよし、そうした実践と行動とが、仏性的人間へと近づかしめる手段であり、また当為であるならば、我々は絶対にそれを避けてはならないのである。しかして、仏性的人間へと近づくと云うことは、此の「私」を軸として転回することではなく、「他」を軸として展開されることである。主我の愛を否定して、無我の愛（慈悲）の立場で生きたいと願うものでなければならない。この立場こそ、現代の我々に課せられた当為なのである。

○「……されば日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲・すぐれたる事をそれをもいださぬべし。……」（開目抄・昭定遺五五九頁）

○「……涅槃經云一切衆生受・眞苦・是如来一人苦等云云。日蓮云一切衆生同一苦・悉是日蓮一人苦と申べし。……」

（諫曉八幡抄・昭定遺八四七頁）

前出した御文書の文意は、明らかに法華經の「一切衆生・皆是吾子」・「今此三界・皆是我有・其中衆生・悉是吾子・而今此処・多諸患難・唯我一人・能為救護」（譬喻品）の絶対慈悲の精神を基調とされている。而も、開目・八幡の両抄に於て強調されるのは、忍難の慈悲となんしのぢやあじひ同悲同苦どうひどうくの慈悲の精神とである。筆者はいとも簡単に「嘆きの慈悲」とか「同悲同苦の慈悲」と表現したが、実はこの慈悲の精神は余りにも一般的に用いられもし、或は人間性回復の根源であるというような意味で、一つの精神的道具にもなりつつある。

然し大事なことは、宗祖が忍難の嘆きの慈悲・同悲同苦の精神へと到達した、その人間として、宗教者として苦しみ、痛み、そして宗教理念へと昇華していったことに、我々は思索の眼を向けなければならない。我不愛身命・但惜無上道とは、当に斯うした宗教精神であろう。

日蓮聖人その人は所謂、超人ではなかった。それどころか、刀杖瓦石・数々見擯出の法難に遭遇すれば、肉体的に精神的にも苦痛をおぼえ、酷寒の佐渡の風に身を震わせたであろう。我々と同様に生身の肉体の所有者であったのである。実はこの生身の人間であることが大事な点である。木石の如く、また鋼鉄の如き肉体の所有者であれば、人間日蓮を論ずる必要はないのである。自己が蒙った肉心両面に亘る痛みいたみ・苦しみくるしみこそ、対他人間愛への根源なのである。宗祖の忍難の痛みは我々の及ぶことのできない大きなものであった。

○「……現在の大難を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思て喜にもなみだせきあえず。鳥と虫とは鳴どもなみだをちず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。此なみだ世間の事には非ず、但偏に法華經の故也」（諸法実相

宗祖の忍難の痛みとは、呻きの痛さであつたと思う。苦痛を忍び、呻吟して堪えに堪えたところに、嘆きの慈悲の精神が生まれる。忍難の慈悲の精神には、呻吟して苦痛を堪え忍んだ者でなければ理解のできない「呻き」の痛さが根底となつてゐる。元々、慈悲の「悲」と云うのは、哀憐・同情の意味をもつと共に、「呻く」と云う心理的衝動の意味が強い。呻く痛さというのは、声が口をついて出ないものである。坐を抱え、背を丸めて、疼痛を堪え忍ぶのが「呻く」ということである。この呻吟して烈しい痛みを忍んでこそ、他人の悲痛を本当に理解できるのである。

宗祖の云う「忍難の慈悲」「嘆きの慈悲」の精神とは、聖人の宗教を形成する背骨である。法華經の色説に法悦をかみしめ、捨身弘教の生涯に歓喜をおぼえるというのは、ひとり「今生の日蓮一人だけ」の歓びではなかつたからである。宗祖が常に（常不駐の忍難弘教）限界状況の下に法悦歓喜しえたと云うのは、そこに對他実践の根源としての「忍難の慈悲」が基調となつてゐたからである。宗祖の生涯が極めて能動的で、積極的であつたと評価されるのは、對他実践愛に生きることに全生命を賭したからである。

○「……日蓮は日本国東夷東条安房国海辺の旃陀羅が子也。いたづらに朽ん身を、法華經の御故に捨まいらせん事、あに石に金をかふるにあらずや……」（佐渡御勘気鈔・昭定遺五一頁）

○「……何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。心こそすこし法華經を信じたる様なれども、身は人身に似て畜身也。……我今度の御勘気は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脱れんずるなるべし……」（佐渡御書・昭定遺六一四頁）



○「此身を法華經にかうるは石に金をかえ、糞に米をかうるなり。……法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相に日蓮さがけしたり。……」(種々御振舞書・昭定遺九六一頁)

右に摘出した御文書の聖意は、法華經の信仰に我が身を捨ててなほ生きることのできた、無冠の民・人間日蓮の誇り、宗教者としての法悦を吐露されたものである。さらに重ねて、「旃陀羅」が子という表言の中に、日蓮その身は宿業の枷を背負った人間であることを意識的に表現し、そこに滅罪への祈りの行を表明したものである。

いま筆者自身、意圖的に「漁師の子」、「旃陀羅が民」という庶民の人としての宗祖をとりあげたのは、我々凡性と同次元の場に於て——魂・心といった深奥領域にも触れつつ——人間をみつめてみたかったからである。

さて前出した御書の中に、無冠の民・日蓮この身を法華經の爲に捨てることは、「石を黄金にかうる」程の大いなる歡喜であるとの表現がなされている。文字通り、字句の通りに受けとめれば、氣力注溢した宗教者の誇りと、法華信仰に生きた躍動的生命感を汲みとることができる。確かにそうではあるが、その「石を金にかうる」とまでに、法悦歡喜を示された宗祖の弘教実践を支えた精神構造の背景には、懺悔することの意識が強く働いていたと思う。一般的に云って、懺悔ときけば消極的な状態を想起するであろうが、しかし、宗祖の場合は旃陀羅が子としての宿業を背負った身の滅罪への祈りの具現として、かえって、忍難弘教の厳しさのうちに自己を懺悔者として位置づけ、ひたすらに六難九易の宗教的実践を歩まれたのである。斯うした意味で、忍難弘教は懺悔滅罪への姿でもあり、極めて能動的に行動する人となったのも、懺悔の意識に於て我々凡機とは根本的に滅罪への契機を異にしたからである。

懺悔をするということは、その個人の意志に関わることである。キリスト教に於ては、自己が罪と悲慘とにおいて

あることを承認し、それを言葉をもって表明する告白であるとしている。そして、懺悔における「罪」とは神からの背反、意志の顛倒に基くものであるから、懺悔とはまさに意志の転換であり、神への背反を告白することである。

（江藤・高田 松本・共編「西洋中世思想の研究」岩波書店）こうした神への背反を告白することをもって、懺悔（回心）とする態度はキリスト教（聖書）を貫く基本精神である。然しこの立場での懺悔する態度には、自己を罪人と規定して、神の恩寵（救い）の掌に在ろうとする消極性がにじみでているように思はれる。しかし、かかるキリスト者の立場からは生きた人間への理解はうまれ難いであろう。確かに、懺悔するのは個人自身である。そしてその行為は苦しく痛みをおぼえるであろう。しかし、懺悔が人間にのみ許された行為であれば、懺悔は歎びへの契機でなくてはならない。懺悔に於て自己を新にし、懺悔に於て新に出直すことのできる自由の可能性をみつめたいものである。当に宗祖は此処の大事なところを実践もって垂範されたのである。

宗祖は「いたずらに朽ちん身を法華経の御故に捨てまいらせん事、あに石に金をかふるにあらずや」と述懐されたが、これを単なる感懐としてうけとめてはなるまい。自己が全生命をたたきつけて、我不愛身命・但惜無上道と生き抜いた境涯にしてはじめて云いうる心境である。だからこそ、あの忍難苦斗の境涯をして、「日蓮が流罪は今生の小苦」（開目抄）とも、「日蓮は世間には日本一の貧者なれども、以二仏法三論ずれば、一閻浮提第一の富者也」（四菩薩造立鈔）とも云わしめたのである。しかし、その「一閻浮提第一の富者也」とのコトバは、決して驕りたる人間の宣言ではない。それどころか忍難弘教の境涯をして「今生の小苦」とまでにうけとめられ、懺悔の菩薩道を歩むことのできた心境に、謙虚のなかにも誇りと自信とを滲ませているのである。この胸奥に秘めた活力が実践行動の人・日蓮聖人をうましめたのである。